慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	張薦『霊怪集』について
Sub Title	On the study of Zhang Jian "Lingguaiji"
Author	溝部, 良恵(Mizobe, Yoshie)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Keio Hiyoshi review of Chinese studies). No.14 (2021.) ,p.171- 183
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	長堀祐造教授退休記念号 研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20210331-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

張薦『霊怪集』について

溝部良恵

一．はじめに

従来の唐代小説研究においては、唐代小説を代表する伝奇は、六朝志怪の後を継ぎながら作者が構成、描写に工夫を加えると同時に、想像力を駆使し意識的に創作したものであり、初唐の王度『古鏡記』など数篇の先駆的な作品を経て、中唐初期に至り沈既済『任氏伝』、白行簡『李娃伝』などの作品が突如集中して書かれたとされてきた。以後唐代小説の研究は、この枠組みに沿って進められ、初、盛唐期は、特筆すべき作品がない空白期と考えられ、研究対象は唐代小説の黄金期である中唐初期に書かれた単行の伝奇に偏る傾向があった。その結果、実際は伝奇が発生する前後にも、伝奇を上回る膨大な数の志怪風の作品が書き継がれ伝奇と併存していることが見落とされがちであり、またそれらの作品が伝奇の発生にいかなる影響を及ぼしたのかについても、解明されないままであった。筆者は、以上のような状況に対し、伝奇発生の過程を解明し、新たな唐代小説史叙述の視座を提出するためには、

初、盛唐期から中唐初期、伝奇発生以前の作品を分析し、それらを積み重ねつつ、各作品間の影響関係に考慮し、この時期の小説の制作状況の全体像を明らかにすることが必要であると考え、特に重要な小説集として、唐代初期の牛肅『紀聞』、中唐初期の戴孚『広異記』に着目してきた。[1]

以上のような問題意識の中で、もう一つ注目すべき小説集として、中唐の初め、徳宗の貞元年間（七八五―八〇五）頃に成書したと考えられる張薦の『霊怪集』がある。しかし従来『霊怪集』については、「郭翰」（『太平広記』巻六九、以下『広記』と略す。）、「王生」（『広記』巻四五三）など幾つかの篇について言及される以外、[2] 小説集としての全体的な研究は、これまでほぼ行われてこなかった。そこで本稿では、『霊怪集』の作者張薦及び逸文について明らかにし、『霊怪集』研究の端緒としたい。

二　張薦について

張薦は、字は孝挙、深州陸沢（現河北省）の人である。『新唐書』巻一六一に伝がある。また権徳輿（七五九―八一八）による墓誌銘「唐故中大夫守尚書工部侍郎兼御史大夫史館修撰上柱国賜紫金魚袋充弔贈吐蕃使贈礼部尚書張公墓志銘並序」（『権徳輿詩文集』巻二十二所収。以下「張薦墓誌」と記す。）[3] が残されている。そのほか韓愈『順宗実録』巻三、また張薦の孫の張読の墓誌銘、「唐故通議大夫尚書左丞上柱国賜紫金魚袋贈兵部尚書常山張公墓誌銘并序」（徐彦若撰、以下「張読墓誌」と記す。）にも張薦に関する記述がある。[4]

これらをもとに張薦の生涯についてたどってみたい。祖父は、『遊仙窟』、『朝野僉載』、『龍筋鳳髓判』などで知られる張鷟である。張鷟については、新旧『唐書』「張薦伝」や莫休符『桂林風土記』にも記載がある。張鷟は、

若い頃より文名をはせ、弱冠の年に「下筆成章」科の科挙に及第した。新羅や日本の使者が唐を訪れた際には、大金をはたいてその文章を買って行ったという。周知の通り、張鷟自身と思われる主人公張生が神仙の窟に迷い込み、崔十娘を名乗る美女と一夜を過ごす『遊仙窟』は、中国では早くに失われてしまうが、日本では、奈良時代に伝えられて以降、多くの写本や刊本が作られ、日本文学に大きな影響を与えたといわれる。また『朝野僉載』は、武后期の朝野における出来事を記した書で、正史には出てこない当時の風俗、習慣などが記され、その中の多くに当時の政治への鋭い批判が含まれている。また『龍筋鳳髓判』は、科挙の試験に課された判の文書の例文集であり、受験参考書とも言うべきものである。

薦の父については、これらの文章では、揚州天長県令になった経歴が書かれているが、それ以上詳細は定かではない。[5]

張薦自身は、天宝三年（七四四）に生まれた。七歳で詩を作り、十歳で『史記』を読みこなすなど、幼少期より聡明であった。顔真卿に認められる。史官を長く務め、尚書工部侍郎など要職を歴任した。その後、吐蕃の首長が亡くなった際に、弔祭使として吐蕃に赴くが、その地で病に倒れ、貞元二十年（八〇四）六十一歳で亡くなった。張薦には、八人の息子がいたが、その一人に希復がいる。希復は、河南府士曹、集賢校理などの職を務め、礼部尚書まで進んだ。希復は、『酉陽雑俎』の作者である段成式と交流があったことが知られている。希復自身も段成式に、自分の見聞きした異聞を語っており、『酉陽雑俎』中に四則が残されている。[6] また希復の妻は、『玄怪録』の作者として知られる牛僧孺の娘である。この希復と牛僧孺の娘の息子が、『宣室志』を書いた張読である。

張読は、大和七年（八三三）に生まれ、大中五年（八五一）、十八歳頃に及第したと考えられる。『宣室志』について、成書の時期は定かではないが、現存する逸文には大中五年頃までの話があり、張読の青年期に書かれたもの

と考えられる。『宣室志』も早くに原書が失われたが、十巻ほどあったと思われ、中には、中島敦の『山月記』とあらすじを同じくする化虎譚「李徵」（『太平広記』巻四二七）がある。

以上にあげた書名は、いずれも唐代の各時期を代表する小説といえるものであり、張薦自身が『霊怪集』を著した原動力として、こうした家庭や友人との交流関係が大きく影響したものと推測できる。張薦の一族がどのように小説制作にかかわり、それぞれの作品が、次の世代にどのように引き継がれていったのか、これは冒頭に筆者が問題意識としてあげた、六朝志怪から唐代伝奇へという小説史の流れを考えていくことと重なり、張薦の一族の一事例として終わることなく広がりを持つ問題と思われる。

三　『霊怪集』逸文について

『旧唐書』本及び権徳輿の「張薦墓志」には、張薦が『霊怪集』を著したことは記されているが、巻数は記されていない。一方、『新唐書』芸文志、小説家類には、『霊怪集』の巻数は、二巻と記されている。

また戴孚『広異記』の序として記された顧況「戴氏広異記序」では、顧況が「本朝志怪之志」として、「劉子政之列仙、葛稚川之神仙、王子年之拾遺、東方朔之神異、張茂先之博物…」など、顧況が考えた歴代の志怪の書名が列挙されているが、そこには以下のようにある。

国朝燕公梁四公伝、唐臨冥報記、王度古鏡記、孔慎言神怪志、趙自勤定命録、至如李庾成張孝挙之徒、互相伝説。

国朝、つまり唐代について、唐臨『冥報記』、王度『古鏡記』の書名などとともに、書名はあげられていないが、李庾成、張孝挙の名があがっている。李庾成についての詳細は不明であるが、「孝挙」は張薦の字であり、張薦のことである。また「互相傳説」とは、李庾成の書と張薦の書、すなわち『霊怪集』のことを指すと思われる。

「戴氏広異記序」には、顧況がこの序を書くに至った経緯が書かれている。顧況と『広異記』の作者戴孚は、ともに至徳二年（七五七）の科挙に合格したことから、交流を始めたと考えられる。顧況と戴孚が、生涯を通じ交友を持っていたかどうかはわからないが、「序」には、戴孚が饒州（現江西省）で五十七歳の生涯を終えた後、二人の息子達が顧況に「序」を書いてほしいと懇願してきたと記されている。顧況は、貞元五年（七八九年）饒州に左遷され、貞元九、十年頃まで饒州にいたようである。恐らくこの頃、戴孚の息子達により「序」の執筆を依頼されたのではないかと考えられる。以上から、貞元年間（七八五—八〇五）頃には、『霊怪集』は人々に広く読まれていたのではないかと思われる。

しかし宋初の書目『通志略』では、作者不詳、巻数も一巻となり、すでに散逸していたようである。現在、『広記』、『太平御覧』、『類説』などを中心に逸文が存在する。中でも最も多いのは、『広記』に残された逸文である。しかし『広記』自体に、版本の問題があり、また『霊怪集』の逸文についても出典問題などがある。[7] そこで以下、『霊怪集』の逸文について考察を加えたものとして、以下の諸本に収録する各話を比較し、現時点での逸文を確定したい。

一．陶敏主編『全唐五代筆記』（三秦出版社、二〇一二年）

二．李剣国『唐五代志怪伝奇叙録（修訂本）』（中華書局、二〇一七年）（以下『叙録』と略）

三．張国風『太平広記会校』（北京燕山出版社、二〇一一年）（以下『広記』会校本と略）

『全唐五代筆記』は、『広記』に限らず、諸本に散逸する唐代の小説、筆記を集め、校勘を加えたものであり、現存する『霊怪集』の逸文の全体像を見ることができる。李剣国『唐五代志怪伝奇叙録（修訂本）』は、唐から五代にかけての各書に散逸する小説、筆記について、作者、版本、流伝、篇目、後世への影響、評価を整理したもので、初版刊行の一九九三年以来、唐代小説研究に欠かせない書である。また、『太平広記会校』は、従来『広記』の排印本として定評のある中華書局版『太平広記』を引き継ぎながら、台湾大学所蔵の孫氏宋本、談刻本よりも百年ほど前に李氏朝鮮で刊行された成任『太平広記詳節』[8]等と比較校勘し、多くの新しい成果を取り入れている。

以下『全唐五代筆記』の収録の話を中心に、各書で判断の分かれる話について検討してみたい。『全唐五代筆記』には、付表のように、『広記』十七話を中心として、合計二十三話の話が『霊怪集』の逸文として挙げられている。「表1」は『全唐五代筆記』中において、『霊怪集』の逸文と判断された話であり、「表2」は逸文である可能性は低いとされている十話である。備考に『霊異集』、『霊怪録』とあるのは、『広記』に引用の書名である。『広記』では、引用書名が正確な記載でないことが多々ある。

17「姚康成」について、『全唐五代筆記』は、『霊怪集』の逸文としないが、『叙録』においては、逸文とされている。この点については、内容に触れながら、次節で検討してみたい。

また22「南柯太守伝」については、周知の通り、作者は李公佐であり、本文末尾に「公佐貞元十八年秋八月自呉之洛」との記載があり、張薦の著作ではないことは明らかである。しかし南宋胡仔『苕渓漁隠叢話』後集巻三八に、「『霊怪集』載『南柯太守伝』，与『枕中記』事絶相類」との記述がある。先にふれたように、『霊怪集』は宋初には、

すでに散逸し、その後に編まれた『霊怪集』のうちには、他書の逸文も含まれていたことが推察される。

以上、現存する二十三話のうち、十三話もしくは十四話が『霊怪集』の逸文と考えられる。

表1『霊怪集』逸文

	篇名	出典	備考
1	郭翰	『広記』巻六八・女仙	
2	楊昭成	『広記』巻二八〇・夢鬼神	
3	関司法	『広記』巻二八六・幻術	
4	慕容垂	『広記』巻三二八・鬼	
5	河湄人	『広記』巻三三〇・鬼	霊怪録
6	中官	『広記』巻三三〇・鬼	
7	王鑑	『広記』巻三三〇・鬼	霊異集
8	李令問	『広記』巻三三〇・鬼	霊怪録
9	鄭生	『広記』巻三五八・神魂	霊怪録
10	王生	『広記』巻四五三・狐	霊怪録
11	張胡子	『広記』巻四六七・水族	
12	呉興妖童	『御覧』巻七一八	
13	房琯	『天中記』巻五六	

表2『霊怪集』の逸文ではないと思われる話

	篇名	出典	備考
14	陳阿登	『広記』巻三一六・鬼	『搜神後記』巻六収録
15	曹唐	『広記』巻三四九・鬼	五代の話。
16	鄭絪	『広記』巻三六五・妖怪	元和年間（八〇六―八二〇年）の話。
17	姚康成	『広記』巻三七一・精怪	貞元年間（七八五―八〇五）の話。『叙録』では、『霊怪集』の逸文とする。
18	張不疑	『広記』巻三七二・精怪	開元年間（八三六―八四〇）の話。
19	薛放曽祖	『広記』巻四四六・畜獣	穆宗（在位八二〇―八二四）の話。
20	東蔡女鬼	『猗覚寮雑記』巻上	『広記』巻三二六引『志怪録』
21	崔韜	『類説』巻二九	『広記』巻四三三引『集異記』
22	南柯太守伝	南宋胡仔『苕渓漁隠叢話』の記述による。	『広記』巻四七五引『異聞集』
23	顧光宝	『説郛』（涵芬楼本）巻三	『広記』巻二一〇引『八朝窮怪録』

四．『霊怪集』の特色

現在残されている『霊怪集』の逸文は、もとは原書が二巻あったと考えられることからすれば、ごく一部であり、これらをもって『霊怪集』の全体像を考えるのは難しい側面もある。しかし残された逸文から感じ取ることのでき

る特色の一つとして、『霊怪集』の中には、話の描写を工夫し、読者を意識した記述が多くみられることが指摘できる。

例えば、1「郭翰」は、「夫と七夕の夜にしか会うことのできない織女が、郭翰のもとを訪れ、枕を共にするようになり、七夕の日には、夫の元へ戻る」という話である。天帝の怒りを買い、一年に一度しか会うことのできない牽牛と織女の話に、人々は、夜空に広がる天の川を見上げながら、引き離されてしまった夫婦の悲しさと想いの強さに思いめぐらし、連綿と語り継いできたものと思われる。しかしその夜空を見上げながら、時に人々はこの「郭翰」の話のようなこと、「もし一年に一度しか夫と会うことのできない織女が自らの元にやってきたら」というようなことを想像し、語り合うこともあったのではないだろうか。

3「関司法」は、「ある人の息子とその年老いた使用人の孫が同年代であったので、一緒に遊んでいたが、使用人の孫はいつもある人の息子のお古をもらっていた。ある時、年老いた使用人がそのことを不満に思い、息子と孫に違いはないと言いながら、妖術で息子を孫と全く同じ姿にしてしまう」という話である。老婆が「主人と使用人であっても同じ年の人間ではないか」と主人に不満をぶつけながら、息子と孫をさっとスカートの下に隠すと、主人の妻が慌てて子供を引っ張り出すが、二人とも孫の姿をしており見分けがつかない。老婆の理屈は、主人たちにとっては言いがかりに近いものであるが、一方で、同じ年の子供が生まれた環境によって、一生変えることのできない身分の差を背負っていること、そしてそれは、老婆の妖術でいとも簡単に主人の子供も孫になってしまったように、ほとんど偶然のような不条理なものであることをも示している。

また10「王生」は、「林の中で立ちながら、文書を見ている野狐を見つけ、目にけがを負わせ文書を取り上げたが、狐が復讐にやってくる。狐は、王の母には科挙に及第したので家産を整理して王の元へ来るようにという知ら

せを、王には母が亡くなったという偽の手紙を送る。そして悲しみにくれ葬儀の用意をしながら故郷に向かう王生と王が科挙に及第したとの朗報に一族で喜ぶ家族が鉢合わせするようにたくらむ。互いに送られた手紙を突き合わせてみると、白紙の紙になっている」という話である。冒頭から、狐は、人のように立ち、いかにもいわくありげな様子を見せる（日晩，柏林中見二野狐，倚樹如人立，手執一黄紙文書，相対言笑，傍若無人）。また王への復讐方法は手の込んだものであり、母死去の知らせに落ち込み実家へ急ぐ王生と、息子の成功を聞き喜びながら息子の元へ赴く母達の対比は、狐の復讐の残酷さを際立たせていて非常に印象的である。

以上の三話に共通するのは、それぞれの描写は、不思議な出来事を記すことが主眼というよりは、様々な仕掛けで読者を驚かせる方向へ向かい、読み物としてのおもしろさを意識して書かれている点である。

以上のことを踏まえ、前節で取り上げた17「姚康成」について考えてみたい。内容は、「太原掌書記の姚康成が汧隴（現陝西省）に使いし、長い間空き家となり荒れ放題であった邢君牙の旧宅に泊まったところ、夜中に三人の人が詩を吟じる声が聞こえてきた。康成は、三人の姿を見ようと屋敷の外に出たが、見失ってしまった。翌朝、再び声がした場所を訪ねてみると、鉄の銚子、笛、箒があるのみだった」という話である。『全唐五代筆記』では、『旧唐書』に基づき、邢君牙が亡くなったのは、貞元十四年（七九八）であることから、旧宅が長く空き家となり荒れ放題であった（「其宅久空廃，庭木森然」）という記述との整合性を考慮し、この話は後に『霊怪集』に加えられたと判断している。しかし、こうした明らかに読者を意識した仕掛けを持つ話は、張薦が記したと考えてもさして違和感はない。また前任者がいなくなり荒れ放題の赴任地の屋敷では、怪異現象が起こり、新任者が訪れ、怪異の原因を明らかにするといういわゆる凶宅譚は、『広記』の中にもよく見られる話であり、姚康成が尋ねたのは、邢君牙が任地を去った後の邸宅と考えれば、『霊怪集』中の話である可能性も考えられる。そしてこうした仕掛け

を持つ話は、『玄怪録』中の「元無有」とも共通するところであり、牛僧孺は、『霊怪集』からこの話の着想を得た可能性もあるかもしれない。「姚康成」を『霊怪集』の逸文とするか否かは、類話も含め、さらなる検討が必要と考えられる。

五. 終わりに

以上の通り、『霊怪集』研究の端緒として、作者張薦と『霊怪集』の逸文について考察を試みた。今後さらに、各話の分析を進めていきたいと考えているが、その際に、張氏一族の小説制作の中における『霊怪集』の位置づけ及び同時代の『紀聞』や『広異記』との比較という二つの視点を意識して、『霊怪集』の性格を考察していく必要があると考える。

六朝や唐の小説は、作者の詳細や各話、小説集ごとの影響関係は不明なことが多く、その制作環境については、解明されていないことが多い。例えば小南一郎氏は、『古鏡記』は、隋から唐への時代の変化の中で、没落を余儀なくされる太原の王氏の一族の間で語り継がれていた物語と考える。また白行簡『李娃伝』や元稹『鶯鶯伝』など中唐期の伝奇を代表する作品が白居易、元稹のいわゆる元白集団の周辺で書かれていることに着目し、彼らの間で、切磋琢磨しながら小説制作を行う環境があったことを指摘している。[9] 以上のように唐代の小説制作には、様々な背景があったと考えられ、張氏一族の小説制作についても解明が待たれる。また冒頭にも指摘したように、このことは同時に、六朝、唐代小説史研究において考察されるべき問題を解く手がかりにもなると思われる。

また筆者がこれまで明らかにしてきたように、『紀聞』や『広異記』には、それぞれ作者が意識して虚構を用い

ている話が含まれている。中唐の伝奇発生以前に、各小説集でどのような試みがなされていたのか、『霊怪集』の分析を通して、改めて『紀聞』や『広異記』の性質も浮かび上がるものと思われる。以上を今後の課題とし、考察を進めていきたい。

注

（1）牛肅『紀聞』について―「呉保安」を中心に」（『中唐文学会報』第十一号、二〇〇四年所収）。「伝奇勃興以前の唐代小説における虚構について―「淮南猟者」（『紀聞』）と「安南猟者」（『広異記』）の比較分析を中心として」（『日本中国学会報』第五二集、二〇〇〇年所収）。『唐代初期小説の研究―牛肅『紀聞』と戴孚『広異記』を中心に』（東京大学提出博士論文、二〇〇九年）

（2）程毅中『唐代小説史』（人民文学出版社、二〇一一年）「霊怪集」、李剣国『唐五代志怪伝奇叙録（増訂本）』（中華書局、二〇一七）など。またＣＮＫＩ（中国学術文献オンラインサービス）には、『霊怪集』を主に扱った論文は、四篇ほどしか見られない。（二〇二〇年、十一月二十四日閲覧）

（3）郭広偉校点『権徳輿詩文集』（上海古籍出版社、二〇〇八年）

（4）「張読墓誌」は、洛陽九朝刻石文字博物館　斉運通、楊建鋒編『洛陽新獲墓誌　二〇一五』（中華書局、二〇一七年）に収められる。これまで張読の伝記については不明な点も多く、この墓誌は、貴重な資料である。またこの墓誌についての論考として、陳尚君「『宣室志』作者張読墓誌考釈」（『嶺南学報』復刊第七輯、二〇一七年所収）がある。

（5）「張薦墓誌」に「烈考不忒，揚州天長県令，贈睦州刺史。」とあり、「張読墓誌」には、「曽祖不忒，皇揚州天長令」とある。

（6）この指摘については、前掲注4陳尚君論文参照。

（7）『太平広記』については、張国風『『太平広記』版本考述』（中華書局、二〇〇四年）、拙稿「北京図書館所蔵『広異

記』抄本について」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第一号、一九九八年所収）、「成任編刊『太平広記詳節』について」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第五号、二〇〇二年所収）を参照。

（8）『太平広記詳節』については、前掲注7の各書を参照。

（9）小南氏の論考については、『唐代伝奇小説論―悲しみと憧れと』（岩波書店、二〇一四年）を参照。